

武藏野日曜聖書講筵 降誕節

わが主キリスト・イエス
——ルカ伝第2章1～20節——

1993年12月19日

小池辰雄

神話的な現実こそ高次な現実 旧・新約は聖靈の光で読む 十字架と聖靈は絶対に切り離して
はいかん 特別な唯一者 終ることなかるべし 聖靈の愛がイエスを出現させた 大歓喜の音
信 董子の君 聖書くらい面白い本はない 十字架と聖靈の預言

【ルカ2】

¹その頃、天下の人を戸籍に著かすべき詔令カイザル・アウグストより出づ。
²この戸籍登録は、クレニオ、シリヤの総督たりし時に行われし初めのもの
なり。³さて人みな戸籍に著かんとて、各自その故郷に帰る。⁴ヨセフもダビ
デの家系また血統なれば、⁵既に孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著
かんとて、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘ
ムという所に到りぬ。⁶此処に居るほどに、マリヤ月満ちて、⁷初子をうみ之
を布に包みて馬槽に臥せたり。⁸旅舎に於ける所なかりし故なり。

⁸この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ありしが、⁹主の使その傍らに
立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。¹⁰御使かれらに言う『懼
るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歓喜の音信を我なんじらに告ぐ、
11 今日ダビデの町にて汝らの為に救主うまれ給えり、これ主キリストなり。
12 なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しある嬰児を見ん、是その徵なり』¹³忽
ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讃美して言う、¹⁴『いと高き所に
は栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人に入れ』¹⁵御使等さりて天
に往きしどき、牧者たがいに語る『いざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給
いし起これる事を見ん』¹⁶ 乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥し
たる嬰児とに尋ねあう。¹⁷既に見て、この子につき御使の語りしことを告げ
たれば、¹⁸聞く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。¹⁹而してマリヤは
凡て此等のことを心に留めて思い回せり。²⁰牧者は御使の語りしことく凡て
の事を見聞せしによりて、神を崇め、かつ讃美しつつ帰れり。



●神話的な現実こそ高次な現実

今日は「わが主キリスト・イエス」という題にしました。皆さんもお一人お一人、「わが主イエス・キリスト」という気持で——この「わが」というのは皆さんお一人お一人のことです——私もその一人というわけです。キリストは、

「われはアブラハムより先に在りしなり」

という。アブラハムどころでない。キリストは天界において、靈界において神と共に永遠の昔から永遠の未来に至るまで、靈的に存在している方です。キリストの靈的存在といふものは大変なことです。それが或る時、地上に現れた。正に降誕なんです。天から降つてきました。これは普通の人には分からん。絶対次元の世界の現実です。相対次元では分からぬいのが本当なんです。次元の非常に高次な世界から低次な次元の世界に降りてこられた。しかもそれはイスラエルの宗教が行き詰まつたという時に。

パリサイ派が跋扈^{ばっこ}して、我を義^よとしているようなご連中。律法には詳しい、またそれをよく守っているといったようなことで自分の信仰的な実存を誇っているようなご連中。これがキリストから言わせると、

「偽善なる学者、パリサイ人」

というわけです。そういう時に神さまが靈界のキリストを地界にイエスとして降誕させた。それは正に、普通の生まれ方とはちがう。聖靈によつてマリヤがみもごつた。

厩戸^{うまやど}皇子^{のうじ}の聖徳太子の誕生にも多少似たようなことがあります。よく「神話」といいますね。相対的な歴史よりももつと高い高次の現実を神話というような言い方をする。神話的な靈的な現実をいいかげんにしては、聖書は読めない。創世記から默示録にいたるまで、そのような現実から相対界に現れた事実が聖書です。

「こんな事があるか?」

なんて言つてたら、分からぬ。「こんな事があるか」と思われるほどに聖書の内容は普通とちがう。ということは、次元の高い世界を相対次元の言葉で表現しているから、分からぬわけです。

「^{おとめ}処女マリヤが神の子を産んだ」

ということは普通の人には聖書物語くらいにしか思わない。

「そんな事があるか?」

と、いわゆる自然科学的には分からぬ。そういう絶対次元の世界に我々の魂がはいると、

「それは本当だ」

ということがはつきり言えるようになる。

「マリヤは聖靈によつてみごもつた」

ということは正にそのことです。キリストはそういう生まれ方でなければ、生まれようがないお方であつた。ですから、そのことで我々は神話的な現実こそ高次な現実であるという



ことをハタと受けとらないとダメなんです。これが大前提です。

●旧・新約は聖靈の光で読む

マタイ伝1章16節に、

「¹⁶ヤコブ、マリヤの夫ヨセフを生めり。此のマリヤよりキリストと称うるイエス生れ給えり。……¹⁸イエス・キリストの誕生は左のごとし。その母マリヤ、ヨセフと許嫁したるのみにて、未だ偕にならざりしに、聖靈によりて孕りたること顯れたり。¹⁹夫ヨセフは正しき人にして之を公然^{おおやけ}にするを好まず、私に離縁せんと思う。」

ヨセフは「何か知らんけれども彼女は別な男と交わつたらしい。これでは離縁するよりか仕方がない」と。高次な事が分からぬものだからヨセフらしい。離縁した方が彼女のためになると思つた。

²⁰斯てこれら的事を思いめぐらしあるとき、視よ、主の使、夢に現れて言う『ダビデの子ヨセフよ、妻マリヤを納^いる事を恐るな。その胎に宿る者は聖靈によるなり。

素晴らしい宣言です。聖靈によつて神の子が現れた。聖靈によらなければ、キリストは現れない。そういう高次元な所から来られるので、普通の現れ方ができない。正にこの通りなんです。

²¹かれ子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救

い給う故なり』

「イエス」とは「神は救なり」という意味です。ヘブライ語の「イエホシュア」(ヨシュア)からくる。はつきりと主の使が夢に現れた。

夢というのは非常にはつきりした普通の現実と違つた現実が夢として現れる。私はそれを体験してから知つてます。むしろそういう夢で凄いことが示されたりする。夢がいわゆる夢でない。また、

「若い人は夢をもたなくてはいかん」

ということは

「大希望をもて」

という意味で、夢というのは素晴らしい将来に対する希望を表す言葉でもある。夢のないものはダメだというわけです。

²²すべて此の事の起こりしは、預言者によりて主の云い給いし言の成就せん為なり。

特にイザヤ書ですね。

曰く²³『視よ、処女みごもりて子を生まん。その名はインマヌエルと称えら



れん』之を釈けば、神われらと偕に在すという意なり。」（マタイ1・16～23）
これは正にイザヤ書7章にあります。

「¹⁴この故に主みずから一つの予徵をなんじらに賜うべし。視よ、おとめ孕みて子をうまん。その名をインマヌエルと称うべし。」（イザヤ7・14）

と。キリストの別の名は「インマヌエル」「神われらと共に」というヘブライ語です。素晴らしい名前ですね。その少し前の9節に、

「⁹……もしなんじら信ぜばかならず立つことを得じと」（イザヤ7・9）

非常に力強い言葉です。「信する」というのは

「それをまこととする、本当だとする」

ということです。

「もし信じなければお前たちは長く生きてはいられないぞ」と、これはルターが註をした言葉です。旧約から新約にわたって、

「聖書は我につきて証しするなり」

とキリストは旧約聖書のことをそう言つておられる。旧・新約は聖靈の光で読むと、貫しているわけです。決してユダヤの經典ではない。ユダヤ人はそれをそういう角度から読まないから、キリストの預言として受けとらないから、しようがないけれども。相変わらずユダヤ人はその点は頑くななんだ。普通のクリスチヤンでも、いわゆる聖書研究家といふのは、みな旧約のその時の相対的な現実ばかり研究して、

「これは聖靈の光で読まれるべきものだ」

ということをやらない。旧・新約は聖靈の光で読んでください。

●十字架と聖靈は絶対に切り離してはいかん

「聖靈、聖靈」とよく言う人があるけれども、十字架が土台でなかつたらダメです。十字架と聖靈は絶対に切り離してはいかん。ややもすると、十字架が薄くなっている。キリストがルカ伝12章で言つておられる。

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて來れり。

「火」というのは聖靈のことです。聖靈という火を地に投ぜんために来たと。

此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

聖靈が本当に臨んだら、もう後はどうでもいいんだよと。

⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。

これです。「受くべきバプテスマ」とは十字架のこと。十字架を通らなければ聖靈はくださないという。

「聖靈を投じようと思うけれども、先ず十字架に架からなければならぬ。贖罪を遂げなければ聖靈は来ないんだ」



ということです。

その成し遂げらるるまでは思い^{せま}逼^{きた}ること如何^{いかばかり}許^{せま}ぞや。

その次に、

⁵¹われ地に平和を与えたために来ると思うか。われ汝^汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり」（ルカ12・49～50）

とある。「平和」と訳してあるけれども、これは「平安」です。神さまと我々との関係がちゃんと成り立つことを平安という。平和ではない。平和というのは人と人との間のこと。平安がないところには平和はない。神・キリストと我との関係がちゃんと立っているのを平安という。

この平安という言葉が最初に出てくるのは旧約の士師記第6章です。

「²³エホバ之にいいたま^いけるは、心安かれ^{おぞ}怖^{なか}る勿^れ汝^汝死ぬことあらじ。

²⁴ここにおいてギデオン^{かしこ}彼所にエホバのために祭壇を築き、之をエホバシャ

ロムと名づけたり」（士師記6・23～24）

復活のキリストが現れた時にこの「心安かれ」という言葉を使われた。「エホバシャロム」とは「平安の神」ということです。「シャローム」というのは「平安」という字です。ユダヤ人が「ここにちは」「さようなら」という時に「シャローム」という。

「神さまの平安があなたにあるように」

という意味です。縦の関係が平安です。我々に大事なのは神・キリストと我との関係、これが平安です。その時にはじめて、

「わが主キリスト・イエス」

ということが言えるわけです。「主」というのは、別な言葉でいうと、「救い主」ということ。

「わが救い主」

ということです。

●特別な唯一者

イエスの降誕は、どういう所に生まれたかというと、どん底の所に生まれた。宿屋なんか一つもない。泊まる所がない。馬槽^{うまぶね}の中にキリストが最低な生まれ方をなさつた。これが福音の世界です。どん底の生まれ方。いわゆる王侯貴族とは大違いです。

キリストが生まれた時に、ローマ帝国の最初のカイザル、アウグスト・オクタビアヌスが生まれた。「アウグスト」とは「尊厳なるもの」という意味です。ローマ帝国の第一人者が現れた時に、馬槽の中に世界の唯一一人のひと——これは第一人者ではない、唯一一人者です——特別な唯一者が現れた。非常なコントラストです。しかも、これは馬槽の中に。石灰岩の洞窟らしい。その片隅の馬槽の中にキリストは生まれられた。搖籃^{ようらん}は馬槽なんだ。大変な方です。



靈界の素晴らしい存在が、名もない処女おとめマリヤから聖靈の力でもつて、聖靈がマリヤの中に入つてきて、そしてイエスを生んだ。普通の常識では考えられない凄い高次な現実が現じた。

「聖書に書いてあるから、仕方がないから信じておこう」

「なんてではダメです、

「そういう生まれ方こそキリストらしい」

とはつきりと告白するようにならないと。

私は告白している。お説教なんかしていない。私は「教える」という言葉は嫌いだ。教師なんてのは嫌いなんだ、仕方がないから教師をやりましたけれども。「キリスト教」ではない。キリスト道です。我々はみな道の民です。自分の足で歩かなければダメです。

「教えが分かりました」

ではダメです。

「キリスト教が分かりました、聖書が分かりました」

なんて、何を言つているか。聖書の中に投身しなければダメです、その現実の中に自分を投げ入れるようなことでなくては。キリストの中に自分を投げ入れる。とにかく、相対的な汝と我の間ではダメです。

「汝と我が——我が汝か、汝が我か分からん——一如だ、一つだ」

ということ。これが夫婦関係でも、本当の友人関係でも、密なる世界はみな一つの世界です。そうすると、

「その友人のためには生命をも棄てるぞ」

というような気持にお互いになつていくわけです。それを

「刎頸の交わり」

という。刎頸とは首を斬ることです。あの友のためには首が斬られてもいいんだという。

●終ることなかるべし
ではルカ伝に入ります。

「²⁶その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女のおとめもとに、神より遣さる。²⁷この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云う。²⁸御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり』²⁹マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、³⁰御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵みを得たり。³¹視よ、なんじ孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。³²彼は大ならん、みごもいとたかきものくらえられん。また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたえ給えば、³³ヤ



コブの家を永遠に治めん。その国は終ることなかるべし』（ルカ1・26～33）

「その国は終ることなかるべし」

とは大変な注目すべき言葉です。『終りなき国』だという。「終り」というのはダメなんです。

「これで完成した」

なんていうのはダメです。完成したら、その先はもうない。我々は終りなき仕事をしないと。地上では未完成交響楽です。これが本当なんだ。

「これで完結しました」

なんてはダメです。

「私の著作集は十巻で終わりました」

ではない。「全十巻」なんてことを書かなかつた方がよかつた。『エン・クリスト』誌も第53号（1993年1月冬季号）でお終いにしたけれども、実は『エン・クリスト』は終わらない。

常識的な意味で

「これでお終い」

と書きましたけれども実は終わらない。

だから、別な形で私の話を何か書き物にして、内輪の方々にお頒けするのもいいことではないかと思っている。録音をしてあっても、やはり記録になつていないとね。要するに、終りなく進んでいく。この集会も終りがない。

手島さんが仆れた時に――無教会では先生が仆れると、みなその雑誌はお終いにしてしま――私のところに聞きにきて、

「手島先生が亡くなつたので『生命の光』誌はやめようかと思います」

と言つたから、私は即座に、

「何を言つてゐるか。これは聖靈の雑誌だ。聖靈の雑誌はどこまでも続けなければダメだ。君たちがバトンタッチして先に進め」

とつづり言つてやつた。

聖靈の世界の仕事には終りがない。終り無き仕事です。ゲーテもダンテも素晴らしい『ファウスト』や『神曲』という詩を書きましたけれども、あれもあれで終りだと思つたらダメです。ゲーテやダンテは決して終わりだとは思つていないのでしょう、ああいう凄い魂は。

私は自分の生涯で、

「死んだ」

なんていう言葉は使わせない。私は「死ぬ」という言葉は大嫌いだ。キリストをいただいている聖靈の器は死なない。これは正に往生する、往きて生きている。

「小池は大往生した」

と書かなくては。地上の生活から次の世界へ往きて生きる。

「我を信する者は死しても死なず」



とキリストはちゃんと言つておられるんだ、
「死しても死はないんだ」

と。そういう烈々たる生き方で生きてくださいよ。どんな艱難があろうと、いろいろな事があれば逆に神を讃美して進んでいく。神讃美です。

「あらゆる人生の状況、境遇において、ただ神讃美だけが私の気持です」と。讃美歌を歌つていればいい。讃美歌が歌えなくなつたら、おしまいです。風呂に入りながら、讃美歌を歌つていればいい。

●聖靈の愛がイエスを出現させた

そういう不滅の人物が靈界から現れたのが、キリストの降誕です。そして、我々と同じ現実の中に入りながら、超現実の世界を展開していった。イザヤ書53章の贖罪のキリストは、イザヤ書35章の天国的な現実を展開していった。キリストはイザヤ書53章の贖いをちゃんと受けとりながら——これは十字架の贖いです——しかも、地上で35章の天国を現じながら歩いていた。

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書はみなキリストが地上でどのようなことを言われたか、どのようなことをなさつたか、全部これは天国的な言葉です。正にそういう喜びの音信なんです。今日は楽しい日です。

ラテン語で「ミステリウム」という言葉があります。もともと靈的な現実が正にこの「ミステリウム」です。ギリシャ語の「ミトス」とはよく「神話」という訳し方をしている。神話というのは神話的な不思議な事態、次元で、それは実は高次な靈的な次元です。普通の人は、「ミトス」というと、何か架空的のように思うけれども、そうではない。ミトスの現実は架空どころではない。靈的な現実です。我々は聖靈の世界に入ると、普通の相対的現実よりも、もう一つ次元の高い現実の方が楽しくなる。そこで聖書が本当に読めるようになる。だから、

「マリヤよ、恐るな。ヨセフと交わらなくたつて、お前は大変なひとを生むことになる。聖靈がお前をおおうからだ」

と。そうでなければ、キリストは現れない。ヨセフも

「いや、マリヤは誰か他の男とやつたか。それでは俺は離縁する」

なんて、そんなことを思つたんだ。冗談じやない。

〔³⁴マリヤ御使に言う「われ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき」³⁵御使こたえて言う『聖靈なんじに臨み、至高者の能力^{ちから}なんじを被わん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。」（ルカ1・34）〕

35)

こういうところを読むと、そういう凄い次元だということで、私たちは非常に力がくる、



光がくる。しかも、その聖靈は愛の靈、アガペーです。

「聖靈の愛」ということを手島さんが最初に言つた。無教会で私はそういう言葉を聞かなかつた。「聖靈の愛」とは素晴らしい言葉だなと思つた。私や手島さんは無教会の出身だから、無教会は非常に批判的なんです。批判的で、愛でない。頭ですぐ判断して、「どうだ、こうだ」と言う。ものを見て、批判的な気持が先に立つひとはダメです。愛をもつてそれに本当に共感し、それを包むような魂でないとね。愛ほど力強い現実はない。

マリヤを包んだ聖靈は正に愛の聖靈である。聖靈の愛がイエスをここに出現させた。降誕とはそういうことです。洗礼のヨハネのお母さんが聖靈によつてそのことを非常に喜んだと書いてあるでしょ。洗礼のヨハネはキリストの先駆者です。

●大歓喜の音信

ルカ伝2章3節から、

「³さて人みな戸籍に著かんとて、各自^{おののおの}その故郷に帰る。⁴ヨセフもダビデの家系また血統なれば、⁵既に孕める^{はら}許嫁^{いいなづけ}の妻マリヤとともに、戸籍に著かんとて、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘムと

いう所に到りぬ。

「ベツレヘム」というのは「パンの家」ということです。ブレッドハウス。此處に居るほどに、マリヤも満ちて、⁶初子^{ういご}をうみ之を布に包みて馬槽^{うまぶね}に臥せたり。旅舎^{はたごや}におる所なかりし故なり。

⁸この地に野宿して夜、群を守りおる牧者^{ひつじかい}ありしが、⁹主の使その傍らに立ち、主の榮光その周囲を照らしたれば、甚く懼る。¹⁰御使^{みつかい}かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歓喜の音信^{よろこび}を我なんじらに告ぐ、クリスマスは全く大歓喜の音信です。¹¹今日ダビデの町にて汝らの為に救主^{すくいぬし}うまれ給えり、これ主キリストなり。

¹²なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒^{みどりご}を見ん、是その徵^{しるし}なり』

「その嬰兒^{たちま}が救主だ、大なる歓喜の徵なんだ」と。『徵』とは現象体ということです。¹³忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讃美して言う、¹⁴『いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』

「地には平安、主の悦び給う人にあれ」

「平安」ではない。平安です。平安から自ずから平和という横の概念が出てきますけれども、平安を忘れてはダメです。

「いと高き所には栄光、神に。地には平安、主の悦び給う人に」

ということ。「神にあれ、人にあれ」と書いてあるが「あれ」という言葉はない。原文は、



です。

「平安がやつてきた。それだから、大いにあつてください」という、二つの気持をその後にもつてゐる。こうやつて動詞を入れてしまふと本当はダメなんだ。動詞がない方がいい。

「いと高き所には栄光、神に。地には平安、主の悦び給う人に」やつてきた。しかも、大いにあれという、現在完了と未来と両方とも含んだような二つの動詞が略されている。詩というものは、よくそういうように含めて、後は略す。詩文が散文よりも味があるのは、そういうことなんです。散文は何でも説明してしまう。説明しちやつたらダメです。これは原文でも、「在れ」とは何も書いてない。

¹⁵御使等さりて天に往きしとき、牧者たがいに語る『いざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給いし起これる事を見ん』¹⁶乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰児とに尋ねあう。」（ルカ2・3～16）

●童子の君

イザヤ書3章に不思議な言葉がある。

「¹みよ主ばんぐんのエホバ、エルサレムおよびユダの頼むところ倚るところなる凡てその頼むところの糧、すべてその頼むところの水、²勇士、戦士、審士、預言者、ト筮者、長老、³五十人の首、貴顕者、議官、芸に長たる者および言語たくみなるものを除きたまわん。

そんなものはダメだ、そうではないんだという。3節までをひっくり返してしまつて、⁴われ童子をもてかれらの君^{きみ}とし、嬰児にかれらを治めしめん。」（イザヤ3・1～4）

という妙な言葉がある。これはキリストの預言です。12節に、

「……ああわが民よ、なんじを導くものは反てなんじを迷わせ汝のゆくべき途を絶つ」（イザヤ3・12）

とある。イザヤ書2章の始めのあたりからずつと、その預言に関係している。

「²すえの日にエホバの家の山はもうもろの山のいただきに堅立ち、もうもろの嶺よりもたかく拳がり、すべての国は流れのごとく之につかん。³おおくの民ゆきて相語りいわん、いざわれらエホバの山にのぼりヤコブの神の家にゆかん、神われらにその道をおしえ給わん、われらその路^{みち}をあゆむべしと。そは律法はシオンよりいで、エホバの言はエルサレムより出づべければなり。⁴エホバはもうもろの国のかいだを裁き、おおくの民をせめたまわん。斯てかれらはその剣をうちかえて鋤^{すき}となし、その鎗^{やり}をうちかえて鎌^{かま}となし、国は国にむかいて剣をあげず、戦闘^{たたかい}のことを再びまなばざるべし。」（イザヤ2・2）



（4）

万国に戦争をやめさせるぞといふ。それから大事な言葉は、

「¹¹この日には目をあげて高ぶるもの卑せられ、驕る人かがめられ、唯エホバの

のみ高くあげられ給わん。」（イザヤ2・11）

「¹⁷この日には高ぶる者はかがめられ、驕る人はひくくせられん、唯エホバのみ高くあげられ給わん。」（イザヤ2・17）

「²²なんじら鼻より息のいでりをする人に倚ることをやめよ、斯るものは何ぞかぞうるに足らん。」（イザヤ2・22）

「神さまによれ」と。そして、今の3章4節が大事な言葉になる。

「⁴われ童子をもてかれらの君とし、嬰児にかれらを治めしめん。」（イザヤ3・4）

という不思議な言葉が出てる。こういう不思議な言葉が出てくるのには全く驚きます。これはみなキリストに関する靈的な預言が出てる。いきなりこんなことが出てくるのだから、大変なものだね、みなやはり神の靈によつて示されている言葉だから。考えて語つてある言葉ではない。頭の世界ではないから。やはり聖書は聖靈でもつて一貫している。

●聖書くらい面白い本はない

神さまの審きは、その後から恵みがくる。審ききらない。はつきり審くと、その後で今度は恵みがくる。

「恵みは神の審きをおおう」

というような言葉がヤコブ書にある。

「⁴憐憫を行わぬ者は、憐憫なき審判を受けん、憐憫は審判にむかいて勝ち誇るなり」（ヤコブ2・13）

とある。また、こういう言葉がある。

「聖書に『神は我らの衷に住ませ給いし靈を、^{うち}恵むほどに慕いたもう』と云え
るを虚しき」と汝ら思うか」（ヤコブ4・5）

我々の中に住まわせた聖靈を神さまは恵むほどに慕いたもう。サタンに取られては大変だというので、

「^{ねた}恵むほどに慕いたもう」

と妙な言い方をしている。我々は神さまの恵みの愛で守られている。

「神は更に大なる恩恵を賜う。されば言う『神は高ぶる者を防ぎ、^{へりく}謙たる者に恩恵を与える』と。この故に汝ら神に服え、惡魔に立ち向かえ、さらば彼なんじらを逃げ去らん。神に近づけ、さらば神なんじらに近づき給わん。罪人よ、手を潔めよ、一心の者よ、心を潔よくせよ。なんじら悩み、悲しめ、泣け、なんじらの笑を悲歎に、なんじらの歎喜を憂に易えよ。主の前に己を



卑ひくうせよ、然らば主なんじらを高たかうし給わん。」（ヤコブ4・6～10）
 「いい加減な喜びでなくて、本当の悲しみにおいて逆に今度は本当の喜びがくるぞ」
 なんて書いてある。聖書の味は尽きない。聖靈の光で読んでくださいよ、十字架・聖靈の
 光で。十字架と聖靈は絶対に不可離の関係です。

「聖靈の火を投じようとしたけれども、我には受くべきバプテスマ、十字架がある
 んだ」

という、ルカ伝12章49、50節のキリストの言葉は非常に大事な言葉です。そういうポイントをしつかりつかまなくてはいかん。そうすると後は楽に読めるようになる。み靈の光で聖書を読んでいると、もう他の本は面白くなくなつてしまふ。聖書くらい面白い本はない。聖書は力を与え、光を与え、生命を与え、愛を与える。十字架も深い愛だし、聖靈はもちらん愛です。キリストは全部受けた。キリストというひとは大変なたです。

その降誕なんだ、今日は。それをもう既に預言しているんだから。ルカ伝1章に天使がブリエルがちゃんと示してくれている。マルコ伝に、

「⁴バプテスマのヨハネ出で、荒野あらのにて罪ゆるしの赦ゆるしを得さする悔改くいあらためのバプテスマを宣伝のべつたう。⁵ユダヤ全国またエルサレムの人々、みな其の許に出で来りて罪を言いあらわし、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。⁶ヨハネは駱駝らくだの毛織けを著き、腰に皮の帶して、⁷蝗いなごと野蜜くらを食えり。⁷かれ宣伝のべえて言う『我よりも力ある者、わが後に来る。我かがは屈きたみて、その靴の紐ひもをとくにも足らず、⁸我は水にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖靈にてバプテスマを施さん』（マルコ1・4～8）

とある。

● 十字架と聖靈の預言

十字架・聖靈の幼子のことを既にシメオンが預言している。

「²⁵視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔けいげんにしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。聖靈その上に在す。²⁶また聖靈に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、²⁷此のとき、御靈に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法の慣例に遵したがいて行わんとて來りたれば、²⁸シメオン、イエスを取りいただき、神を讃ほめて言う、

『主よ、今こそ御言に循したがいて僕を安らかに逝かしめ給うなれ。³⁰わが目は、はや主の救すくいを見たり。³¹是もろもろの民の備え給いし者、³²異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり』³³かく幼兒に就きて語ることを、其の父母あやしみ居たれば、³⁴シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼兒は、イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起たん為に、また言い逆さからいを受くる



徴のため^{しるし}に置かる。³⁵——剣なんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの人の心の念の顕れん為なり』（ルカ2・25～35）

「言い逆^{のぞみ}いを受くる徴」とある。キリストは大体、言い逆いを受ける。

「⁵希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖靈によりて神の愛、われらの心に

注げばなり」（ロマ5・5）

と。聖靈は愛の靈だから聖靈によつて神の愛・キリストの愛が我らの心に注ぐ。キリストの降誕を受けとるためにはやがて——シメオンが十字架のことも既に暗に預言している——十字架に架かつて聖靈を与えるところのキリストを受けとる。もう降誕の時から、十字架と聖靈の預言が出ているわけですから、大変なひとだね。そして、受けとらない者は躓く。

「²⁵主は我らの罪のために付され、我らの義とせられん為に甦えらせられ給え

るなり」（ロマ4・25）

と。そういうわけで天から降つてきた。それも、ユダヤ教が行き詰まりパリサイが跋扈した、そういうギリギリの時点でもつて、キリストは天界から現れた。処女マリヤをとおして聖靈によつて。キリストの降誕は歴史を二分するところの瞬間なんです。歴史を二分している。

「これから本当の光の世界だ。どんなに闇が深くてもこの光には勝てない」

と。人間は地上の相対的な所でサタンに適当に取り扱われている。けれども、それでキリストの光がダメになつてはいるわけではない。

レンブランドの非常に深刻な絵にはよくどこからか光がさしている。そういうように光がさしているわけなんです。我々はキリストを受けとることによつて、光の子になる。「光」とは素晴らしい字です。太陽が七つの光を放つていてる姿、太陽の輝いてる姿からきた字ですから。もともと御天道様なんだ。ミカ書に「闇も光だ」というような言葉がある。

「⁸我が敵人よ我につきて喜ぶなけれ、我仆^{たお}るれば興^{おき}あがる。幽^{くら}暗に居ればエ

ホバ我の光となりたもう。⁹……エホバついに我を光明に携^ひえいだし給わん。

而して我エホバの正義を見ん」（ミカ7・8～9）

「正義」という訳し方はよくない。「エホバの義を見ん」でいい。「幽暗に居ればエホバ我の光となりたもう」という言葉です。

「²⁸御使^{いま}に在せり」（ルカ1・28）

聖靈が宿つて、マリヤはキリストを生んだ。普通の現れ方とはちがう。これがイエスの降誕です。正に降誕なんだ。

だから、不思議でも何でもない。そういう素晴らしい靈的な次元、そこに自分をおいて、

「これが本当の現実だ」

と。我々の現実はこれが本当で、相対的な現実は夢のごとし、消えてゆく。けれども、この絶対次元からの光でもつて、相対次元の中の本ものはみな天界に映る。反映していく。

